富田河床遺跡の発掘

1975年

広瀬町教育委員会

I　これまでの経過

遺跡の出現　能義郡広瀬町の東方に屹立する富田城は、海抜192mの月山山頂に築かれた典型的な山城で、国の指定史跡となっている。富田河床遺跡はこの富田城の西麓を流れる飯梨川の河床にあり、その範囲は富田城の入口にあたる富田橋から新宮橋の下流に至る約1.5kmに及んでいる。

そもそもこの遺跡が河床に姿を現わしたのは、昭和35年ごろからで、この年富田橋の下手80mのところに砂防用の堰堤が作られ、それと前後して上流でダム建設、また下流で盛んに採砂の行なわれたことなどによるものであった。すなわち、これらによって富田橋の下流域を覆っていた土砂が大量に流失し、河床面の著しい低下とともに遺構がその姿を現わすことになった。その後、露出する遺構面は広がる一方で昭和42年には新宮橋の下流200mあたりまで遺構の存在することが知られ、さらに昭和45年にも新宮橋の上手100mあまりの河原に遺構が露出した。この間、昭和42年と45年には島根県文化財専門委員の山本清氏が現地踏査を行ない、遺跡の重要性と緊急調査の必要性を説くところがあった。

調査経過　昭和48年の夏、山陰地方は34年ぶりの異常渇水に見舞われ、再び河床に各種の遺構が現われた。そのため広瀬町ではこの年の8月、とりあえず露出遺構の一部について記録保存のための緊急調査を実施した。しかし、遺跡が河床に存在するためこのまま放置しておけば早晩流水等による遺構の自然崩壊は必至とみられた。そこで昭和49年度より3ヶ年の継続事業として国および県費の補助を受けて本格的な調査に踏み切り、将来における文化財の保存と活用をはかることにした。

調査は遺跡を発掘する遺構調査班と出土遺物その他文献資料を調査する史料調査班の2つに分け、国立埋蔵文化財センター、島根県教育委員会など諸方面の協力を得て、昭和49年7月20日から8月25日までの間実施した。本年度の調査地区は昨年夏、広範囲にわたって遺構が露出した新宮橋の下流約350mあまりの西岸河原で、これの発掘と平行して航空測量による1000分の1の地形測量図の作成も行なった。

Ⅱ　遺跡の環境

地理的環境　遺跡の所在する飯梨川は、明治４年まで富田川と呼ばれていた。この川は花崗岩の風化地帯にあたる中国山地に源を発し、古くからいわゆる鉄穴流しによる砂鉄の採取が盛んであった。切り崩された莫大な土砂は年々下流域に押し流され、それによって河口に形成された安来平野の沖積が進んだ反面、河床が上昇し、県下でも有数の天井川となった。そのためしばしば大きな洪水をひき起し、そのたびに流域の人々に大きな災害をもたらした。記録・伝承に残る主なものだけでも寛永12年(1635)と寛文６年（1666）の洪水に続いて元禄15年(1702)、享保14年(1729)、延享２年(1745)、宝暦11年（1761)、明和５年（1768)、明治19年（1886）とかなりの回数にのぼる。

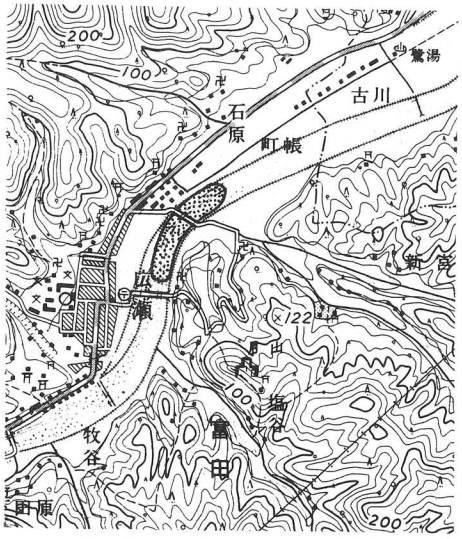

図１　富田河床遺跡の位置(1:50000)

こうした一連の洪水のなかで富田河床に遺跡が埋没する原因となったのが寛文６年の大洪水といわれている。すなわち、この年の秋、能義郡の広瀬では富田八幡宮の東方で堤防が決壊し、富田川の濁流は富田城月山の山麓一帯に溢れ、ついに城下町を一掃するとともに大きく川違いして流路を東に変えることとなった。富田河床遺跡はこうして水没したと伝えられる富田城に関係する城下町遺跡と考えられるものである。

歴史的背景　飯梨川のほとりにせまる富田城は、保元・平治のころ平家の武将悪七兵衛景清の手によって築城されたといわれているが、記録のうえではっきりしてくるのは尼子氏が守護と絶縁して自ら戦国大名として台頭し、経久が実力をもってこの富田城を手中に収める文明18年（1486）ごろからである。その後、尼子氏は永禄９年（1566）毛利氏に降伏するまでこの城を出雲支配の根域とし、一時は陰陽の11ヶ国を従えたともいわれている。尼子氏降伏後は、毛利氏が守将をおいてここを出雲地方の押えとしていたが、慶長５年（1600）の関ヶ原合戦による大異動で堀尾氏が出雲・隠岐を領することとなり、この富田城にあって領国の支配にあたった。しかるに、堀尾氏は慶長12年から松江城を築いて同16年に築城を完成し、松江に移った。堀尾氏が富田に居住したのはわずか10年たらずの短い期間であったが、家臣団をひきいて移住したのであるから、急いで城下の建設に努めたことが考えられる。堀尾氏が松江へ移城した後も、富田の地には何ほどかの町並があったとみられる。しかし、それは以前に比べればはるかに小規摸な集落であったろう。

富田川洪水によってかつての城下と集落が水没したと伝えられる寛文６年という年は、ちょうど松江藩の支藩として新しく広瀬藩が開設された年である。藩祖松平近栄はこの年秋の洪水でもとの城下が川敷となったため、再び新しい町づくりに着手しなければならなかった。こうして新設されたのがかつての河川敷に建ち並ぶ現在の広瀬の町並といわれている。

以上のようなことから富田河床に現われた遺跡は、概ね16世紀から17世紀中頃にわたる城下町関係の遺跡と考えられる。

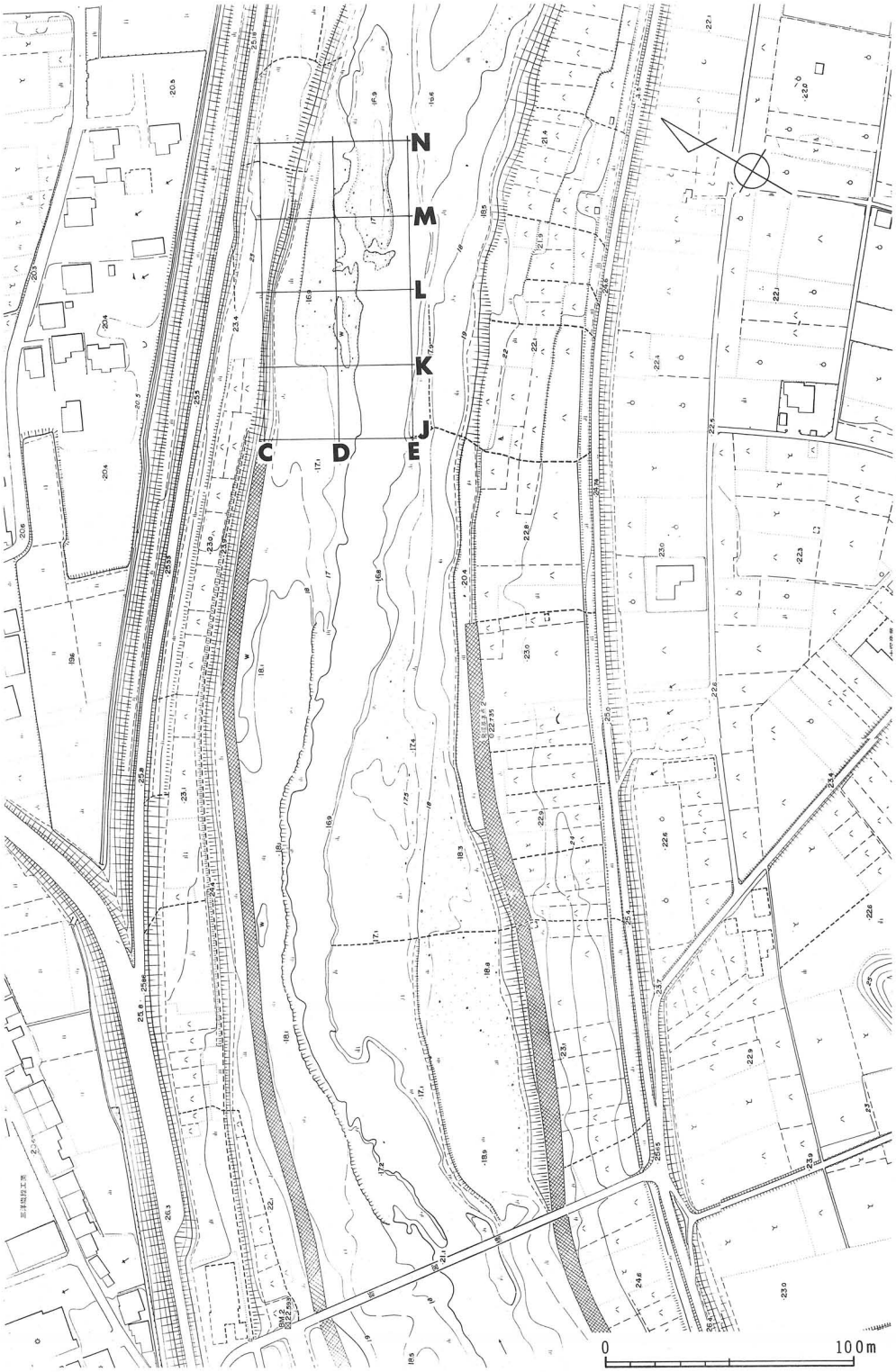

図２　遺跡付近地形測量図

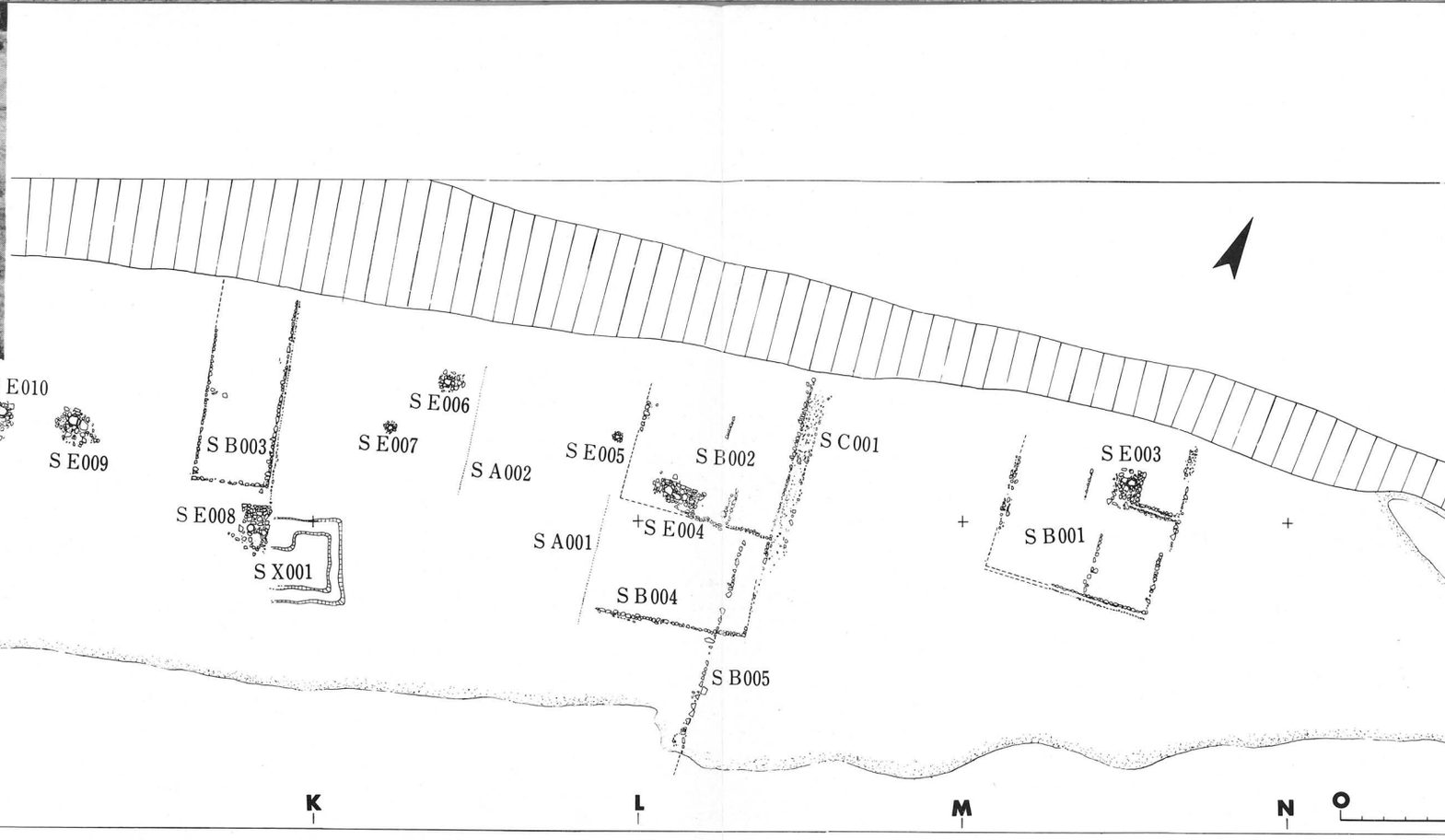

図３　遺構配置図

Ⅲ　遺　　構

これまでの富田河床で確認されている遺構は、道路敷を伴う町並や掘立柱あるいは礎石を備えた建物遺構、住宅の区画を示す石垣、井戸跡、杭列、柵列、道路側溝、雨落溝、配石遺構、さらに鍛冶工房とみられる遺構など各種のものがある。これらはだいたい富田橋近くの堰堤から新宮橋の下流に及ぶ約1.5kmにわたっているが、河川の中央部については川幅の約３分の１ほどの広さで常時水が流れており、この部分では既に遺構面の大半が失われている。

このうち本年度調査で対象としたところは新宮橋の下流約350m あまりの左岸堤防沿いの河原で、ここには長さ180m、幅30m の範囲につぎのような遺構が残されていた。

住居遺構　全体の規模や性格など詳細な点については必ずしも明らかでないが、井戸や雨落溝をそなえ、住居区郭として周囲に石垣をめぐらしたものが３ヶ所あり、ほかに石垣のみを残すものが２ヶ所あった。これらはすでに建物基壇の上面を失っていたが、柱穴や柱根が見当らないところからいずれも礎石を伴う建物で構成されていたものと推定される。このうちＳＢ001とＳＢ002は遺構検出面がほぼ同じで最も高く、住居区郭の主軸もほぼ南北方向にあって一致している。またこの２つは数棟の建物から構成されていたものらしく、郭内にはほぼ同様な位置に石列による仕切りが設けられている。北側が河川の堤防敷にかかるため、住居区郭全体の規模は不明であるが、東西の幅はＳＢ001か16m、ＳＢ002が14.5mある。石垣は河原石を整然と積み上げて構築されており、ＳＢ001には東面の石垣沿いに幅40cmあまりの雨落溝がみられる。井戸はともに石敷を伴う乱石積みものである。ＳＢ001の井戸には敷石の北側に幅30cmの排水溝が設けられている。ＳＢ003の住居区郭は上記の２例より低い面にあり、主軸もやや東に偏している。石垣によって整然と画された郭内は東西７mで、北側は堤防敷にかかるが、現状では18mまで確認でき、南北に細長い区郭であることが注意される。これには南東隅の郭外に長方形の石敷をそなえた石積み井戸と東面の石垣沿いに幅30cmの雨落溝がみられる。

ＳＢ004とＳＢ005は住居遺構として明確なまとまりを残有していないが、ＳＢ004は住居区郭の南面を区画する石垣と北面の石垣一部を残し、南面には石垣に沿って塀の存在を思わせる柵列が認められた。また、ＳＢ004の北側から南に向ってのびるＳＢ005の石垣は、ＳＢ004より一時期古いもので、面を東側に向けて築かれている。

井戸跡　今回の調査では住居区郭に設けられたものを加え、合計11基の井戸跡を確認している。いずれも径30～50cmあまりの石を乱石積みした多角形プランの井戸で、住居に伴うものには例外なく４×2.5mあまりの長方形の敷石がみられる。掘り方については明らかにしていないが、内法は径約70～80cm、深さは概ね２mあまりを測る。石積みの間隙には土砂や汚水の流入を防ぐため粘土の目張りがしてあり、基底部には一部曲物を置いたものもある。１例をあげると、ＳＢ006は石積みの井側に長さ約80cm、径約60cmの木製井筒を二段にはめ込んだもので、井筒は幅10～30cm、厚さ６mmあまりの板を竹釘でつないで作られている。なお、敷石を伴わない井戸は全体に規模がやや小さく、また石の積み方も粗雑である。これは使途の違いから生じた差であろうか。

その他の遺構　以上のほかに性格不明の配石遺構やＳＢ001の東面石垣沿いに小石を敷いた幅1.5mあまりの道路状の遺構、またＳＢ002とＳＢ003との閑地およびＳＢ004の東側に篠竹と杭を北北西の方向に並べた柵列などが認められた。

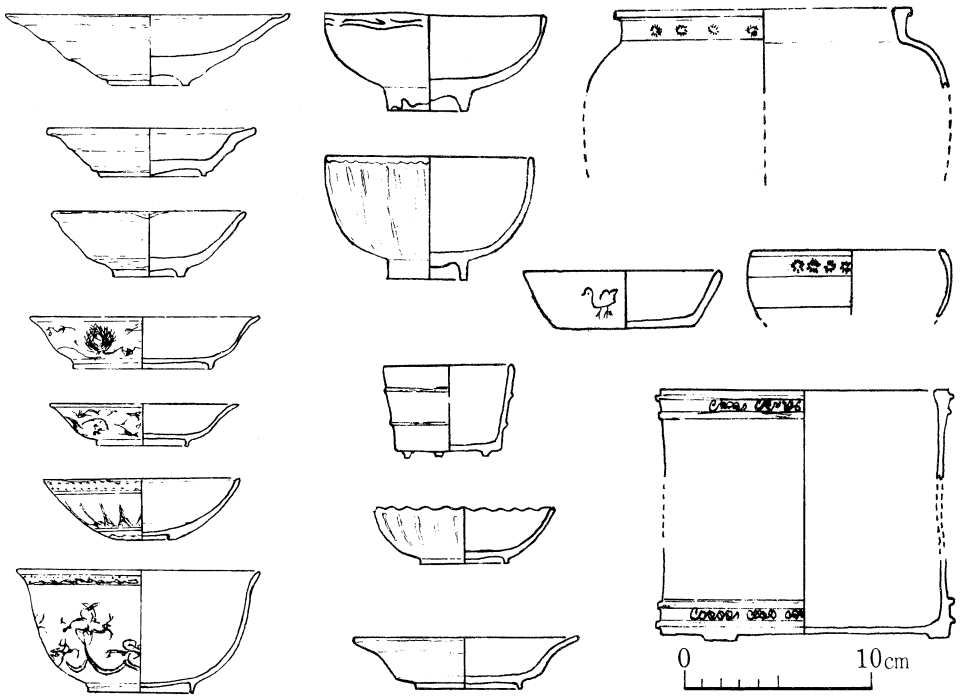

図４　陶磁器・瓦器類実測図

Ⅳ　遺　　物

遺跡の出現以来これまでに河床から発見されている遺物は、各種の陶磁器類、かわらけ・瓦器類をはじめ木製品、金属製品、石製品、鉄工・窯跡関係遺物、自然遺物など尨大な量に達している。それらは概ね中世末から近世前半にわたるものである。

今回の調査で得られた遺物もやはり同様な時期に属するものである。しかし、遺構面の拡がりとその性格を極めることに終始した関係もあってその出土量はそう多くなく、またその大半は遺構面を覆ってる堆砂中から見出されたものであって個々の遺構について明確な年代を決定する資料には恵まれなかった。以下、従来の採集品をもあわせ、一括してそれらの概略を記することにする。

陶磁器類　残りやすく目につきやすいためか量的に最も多く採集され、発見されている。青磁が若干みられるが、大部分は陶器で唐津、伊万里、瀬戸、美濃、信楽、備前陶器などがある。このうち最も多いのは唐津系の焼き物で、黒唐津や青唐津の天目茶碗をはじめ皿、碗、鉢、徳利など２千点近くにのぼる。刷毛目で白く化粧したうえに鉄釉と銅釉で大柄な高砂松などを描いたものも見受けられるのが、大半は無地で器形としては皿が過半を占める。伊万里は碗類に限られており、器高の割に口径が小さく底部の厚いものが目立つ。瀬戸・美濃系陶器としては、近世初頭の美濃の志野・黄瀬戸・織部の皿、碗類が多く、ほかに古瀬戸の唐草文瓶子、皿、付け高台の天目茶碗、香炉なども採集されている。信楽は壺、甕類に限られて出土し、備前焼は主として大甕、擂鉢、壺といった日常雑器が多い。

青磁には明の龍泉窯のものが多く見受けられる。見込みの部分に押形された吉とか富、あるいは春夏秋冬などの文字を中心に花柄を印刻した茶碗類が目立つ。このほか、染付の磁器もかなりあり、幾何学文や龍・花文を画いた碗、皿などが発見されている。

瓦器・かわらけ類　瓦器には堝・甕・擂鉢のほか壺・釜・鉢・火舎といった日常雑器の多いことが注目される。堝は丸底と脚付のものがあり、ともに口縁外周に張り出した縁をそなえている。文様を有する瓦器もあり、鳥形をスタンプした深皿、唐草文系のモチーフ

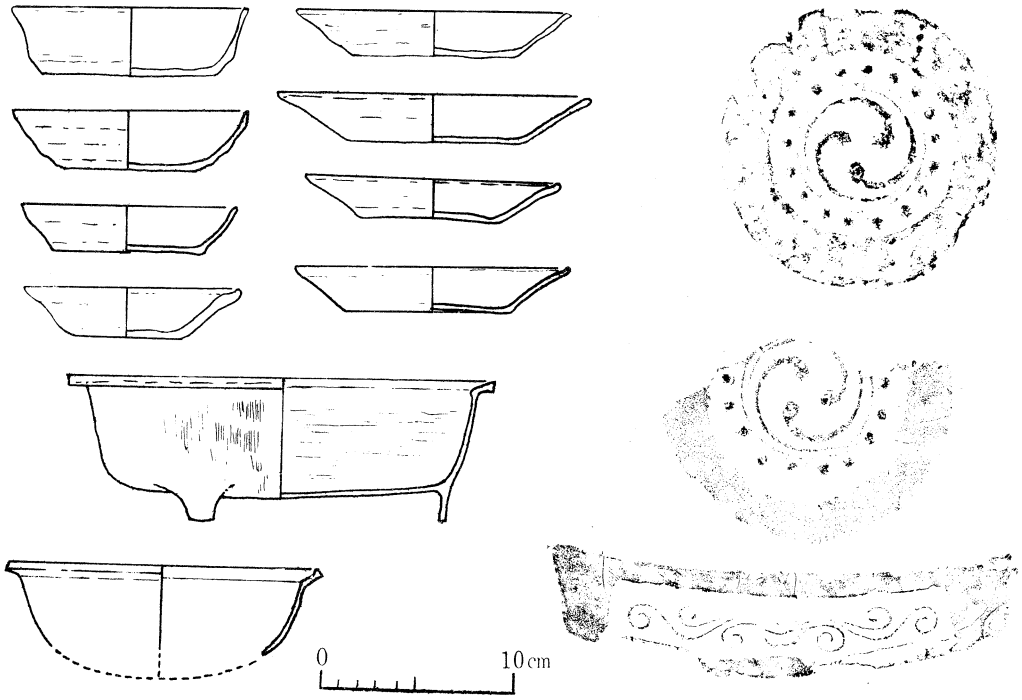

図５　瓦器・かわらけ類、瓦 実測図

を連続施文した火舎、器面に星形をスタンプし大形の香炉などが採集されている。かわらけ類は河床から出土する遺物のなかでは最も多く発見されるもので、糸切底を有する皿が大半を占め、煤の付着した灯明皿も相当ある。器形などからかなり細かく細分化することが可能である。

このほか、富田城跡の出土品と同型式の巴文を有する軒丸瓦や唐草文軒平瓦、また若干の須恵器、土師器などの破片も発見されている。

木製品　柱根、杭など建物に伴うもののほか、漆器、曲物、曲物底板、箸、下駄などがある。漆器は内面を朱、外面を黒く塗った椀が数点出土している。大部分無地であるが、まれに文様を施したものもある。曲物には井戸枠に使用したもの以外に桶状のものが出土している。下駄は今回得たものを加えると７個あるが、そのうち５個は差歯式で、いわゆる枘を表面まで貫通させた露卵の下駄である。枘穴は方形のものと長方形のものの２種がある。

金属製品　煙管、斧、刀身、青銅製刀子、槍身、鉄鏃、鉄釘、銅金具、鉄鍋その他各種の銅銭がある。このうち煙管はいずれも薄い銅板を加工したもので、雁首の火皿が大きく、かつ長い首をそなえた近世初頭通有の形式に属するものである。銅銭は今回の30枚を合せると、すでに200枚近く採集されている。大半は至道元宝、天禧通宝、熙寧元宝、政和通宝などの宋銭で占められ、これに洪武通宝、永楽通宝といった明銭、和銭として寛永通宝が加わっている。

石製品　砥石、石臼、石鉢、硯、宝篋印塔の台石、笠、相輪部などがあり、石臼、石鉢、宝篋印塔はともにこの地方特有の来待石で作られている。砥石は大小２種あり、大形のものは断面多角形で棒状をなし、長さ50cm以上におよぶものもある。石臼には引き臼の磨り合せ面に刻まれた線の荒いものが目立つ。

生産関係遺物　ふいごの火口、ルツボ、鉄滓など鍛冶工房に関係するものと、「くつ」・「さや」その他陶窯の窯道具が発見されている。なかでも鉄滓はかなりの量に達し、注目される。

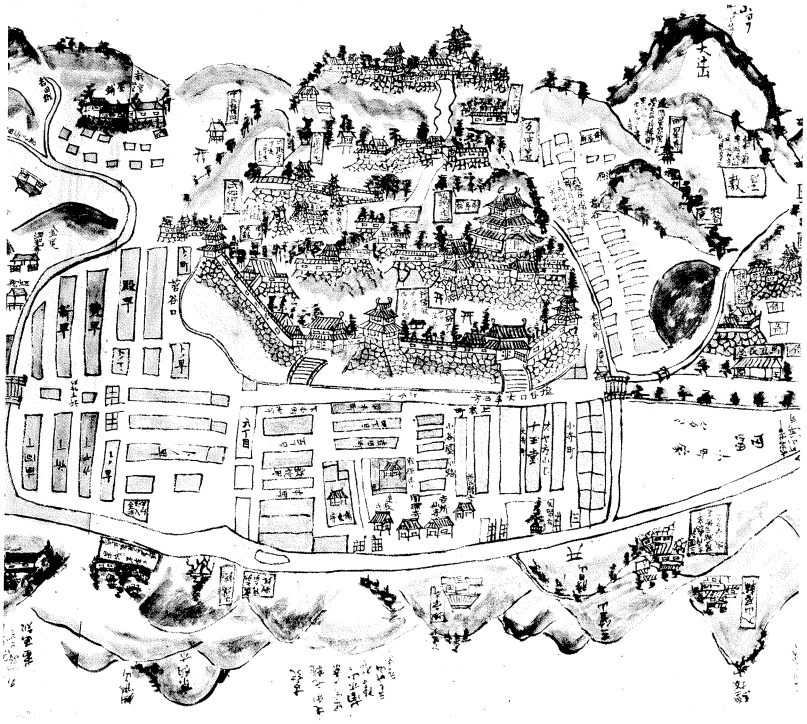

図６　富田城下町絵図（部分）

城下町絵図

富田城およびその城下の町割を図化したものは広瀬町を中心に各地に点在し、その数は20枚を越えるが、それらはおおよそ２通りの図種に分けられる。１つは富田川の中流域から下流の中海に注ぐあたりまで書き込んだもの、他の１つは富田城を中心に描いたものである。しかし、これらはいずれも江戸中期以降、いわゆる軍記物の説明などに用いる目的で作成されたものである。

Ｖ　ま　と　め

現在の飯梨川は、富田城跡のある月山の西麓を流れており、遺跡の現われた河床のあたりは、いわば富田城の玄関先にあたる位置を占めている。尼子氏が富田城を本拠に城下町を形成したとすれば、この河床あたりは当然その重要な部分に該当することが考えられる。永禄９年以後、尼子氏が滅亡してからは毛利氏の守将が在番し、慶長５年から同16年までは堀尾氏が居住したが、この間も以前に比べれば城下町としての比重は大いに異るものであったにせよ常に非常事態に対処できる体制を保つためには、それなりの城下の機構を備えていたものと考えられる。堀尾氏が松江城へ移ってからのち寛文６年秋の洪水までこの富田の地にどれほどの町並があったのか明らかでないが、何ほどかは昔日の面影が残有していたことは間違いなかろう。

こうしたことから富田河床の遺跡は、概ね16世紀から17世紀中頃にわたる富田城の城下町遺跡と考えられ、それは遺跡自体の規模や各遺構の在り方・様相などがまさに城下というにふさわしい内容を備えていることからも疑いのないところである。しかも、発見される各種の遺物は、中国磁器などの将来品をはじめ日本各地の陶器があり、かつそれらは大部分中世末から近世前半のもので占められている。これは河床にある遺跡の性格と年代を示すとともに、この場所が寛文６年に川敷になったと伝えられることとも符合する。

近世城下町はその成立年代が若干前後しながらも多くは、近世初頭に形成されたもので、富田の城下町もそうした例の１つに過ぎない。しかし、多くの近世城下町は時勢とともに変貌し、現在の地方都市と化している。この点、富田河床遺跡は洪水という突発事故により中世末ないし近世前半の城下の姿をそのまま地下に封じて今日に至っており、その意味で全国的にもきわめて稀有な遺跡ということができよう。

（富田遺跡発掘調査団）